

て、予算、業績評価そして差異分析の必要性が生じてきたのである。エンジン・ブロックのすべての作業は、赤い製造指図書という形の見えない会計担当者によって工場中付いて回られたのであった。各作業終了点において、費消された資源に関するデータが記録された。

カーネギー・メロン大学の産業経営大学院の修士課程で勉強しているときに、あるもっともな理由で「数量コントロール」と呼ばれていた別の形態の会計を学んだ。分散した株式所有、長期や短期の信用の広範な利用、複雑な製造工程や財務手段、それに独立した監査を伴った巨大で専門的に経営されている株式会社は、大規模で成熟した形態での会計の複雑性を例証するものであった。組織行動の授業では、会計について言及されることはほとんどなかったけれども、コントロール・システムの必要性和形態を規定する人的動機を、幸運にも、井尻教授に説明してもらった。このときまでに私は、私がこれまで事業、組織そしてコントロールについて学んできたことに関して、自分なりにかなり理解したと思えるようになっていた。私は、単純な組織と複雑な組織における会計の機能についてはかなり一貫した体系図を思い描くことができていた。そうして私は、会計研究へと入っていったのである。

ほとんどの会計研究が、今日では特化した性格を有しているので、狭く限定された領域での会計の特定の機能にのみ、集中して焦点を当てようとする。そこである種の機能は、別の機能よりもより注目を集めることになる。証券評価や業績評価への情報提供そして組織の構成員の動機づけは、主要な、したがってよく注目を集める3大機能である。これらの特定の機能の詳細な研究はもちろん重要であるが、木を見て森を見失う危険性がある。会計研究の森の中で私が方向を見誤ったのは、偏に会計の多様な機能を1つの一貫した構図の中に統合することができなかつたことに起因している。本書はそうした森を見ようとする努力への第一歩である。

誰か他にこうした考え方に興味を持った者がいただろうか。元々本書の内容は、MBA コースの2年次選択科目のための授業用ノートとして書かれ、私が集めた多くの事例とともに授業で用いられた。私は、会計理論についての学部4年生のセミナーでもこのノートを用いて講義をし、ここでも金融雑誌や新聞からの事例や記事を補足的に用いた。また同様にこのノートは、本や雑誌論文

で補足されることによって、Ph.D.の会計学専攻の1年生の会計研究や授業の課題に対して好奇心を呼び起こすのにも用いられた。経営学者や他の社会学者は、しばしば、いかに会計とコントロールが、一見厳密でかつその他の学問から隔離されているように見えても、組織がいかに機能するかについての自分たちの持っている見解とどのように結びつくのかを知りたがっている。本書はこの結びつきのいくつかを示唆している。最後に、実際に実務に携わる人々が、本書の中に、彼らがすでに知っていることを体系化し整理する方法を見出されたとしたら望外の幸せである。

カーネギー・メロン産業経営大学院

シャム・サンダー

## 序 文

---

私は、組織や社会全般における会計とコントロールの機能に関して興味を持っていたことから、それに基づいて、1970年代の半ばには、本著のアイデアを持った。これらの機能はある者にとっては明白であったかもしれないが、1970年代のビジネス・スクールの社会科学的文化の中で勉強していた若い技術者にとっては、そうした大きな構図を理解することは困難なことであった。何年にもわたって、私は、自分が知ったこと、見たこと、読んだことそして教えたことを1つの一貫した体系にまとめるよう努力した。経済的利己心こそが私が求めてきた体系化のための基本原則であると考えようになった。会計の契約理論は、会計実務の多くが経済的諸力によって明確に形成されるという考え方に立っている。

私が会計に興味を持つようになったのはきわめて単純な動機からである。私の姉が大学進学のために家を出た後で、私の父は、農場や家計の記録に、小学校6年生であった私に助力を請うようになった。1週間に一度ほど、私は、父が彼の手帳から記録を読み上げるのに従って、(インドの慣習に従って、借方を右、貸方を左に)仕訳帳記入を行った。ほとんどの記録は、現金支出と農場労働者のための賃金支払発生額であった。農場生産物の販売は、一度に大量に行われ、そう頻繁にあるものではなかった。土地、建物、そして設備は公然と所有されていたが、貸借対照表に計上されることはなかった。その年の自分たちの農業所得を計算するのに、収益から減価償却費が差し引かれることはなかった。

工科大学での経営学の授業や卒業後の工場での労働という経験で、製造勘定、製造指図書別原価計算、原価や間接費の配分等を通して、鉄道車両を1台造るのにどれほどのコストがかかるのかを追跡記録することの必要性を痛感するようになった。巨大工場の非人格的な性格と経営管理者間での責任の分化に伴っ

## 目 次

---

日本語版序文

翻訳にあたって

序 文

謝 辞

### 第1部 企業の契約理論

第1章 会計とコントロールの理論序説 ..... 3

契約の集合体としての組織 3

コンフリクト解消のために共有される諸要因 4

バランスまたは均衡としての組織におけるコントロール 6

会計とコントロールのマイクロ理論 8

会計とコントロールのマクロ理論 11

要 約 13

第2章 会計と企業の契約モデル ..... 15

契約の集合体としての企業 17

会計と企業 24

組織形態と会計形態との対応 35

要 約 37

### 第2部 会計とコントロールのマイクロ理論

第3章 経営管理者の技能のための契約 ..... 45

経営管理者の特徴 45

経営者の契約の形態	50
要約	61
第4章 経営者と会計意思決定	66
会計意思決定の階層	67
コントロール・システムの特徴	72
会計意思決定についての経営管理上の帰結	77
経営者の観察可能な行為	81
要約	83
第5章 利益とその操作	89
利益保存の法則	91
企業における利益の機能	92
利益に対するエイジェントの姿勢	94
利益の操作	100
実証的発見事項の要約	105
要約	108
第6章 投資家と会計	114
投資家集団の特徴	114
投資家の姿勢とその選好	120
投資家のための会計選択機構	123
投資家に対する会計方針の帰結	126
要約	129
第7章 会計と株式市場	134
評価ルールの限られた役割	134
情報仲介者の機能	135
会計および株式市場に関する疑問	136
推量の問題	146
要約	150

第8章 監査人と企業	155
企業における監査の機能	156
監査人の意思決定	159
監査専門職業の制度的構造	165
要約	175
第3部 会計とコントロールのマクロ理論	
第9章 コンベンションと分類	187
コンベンション	188
会計コンベンション	189
会計の経済的特性	191
経済的特性の一時的安定性	196
同質性と分類	198
要約	202
第10章 意思決定の規準と機構	205
社会的選択の規準	205
社会的費用 - 便益分析	212
社会的選択の機構	214
要約	222
第11章 会計の標準化	224
規則と経済的決定	224
規則および基準の経済学	228
基準の経済理論	231
会計基準	232
会計基準の設定機関	236
基準の効果	239
要約	241

第12章 政府、法そして会計 .....	244
契約エージェントとしての政府	245
超企業としての政府	249
要 約	254
第13章 公共財組織の会計 .....	257
用語と分類	257
NRIOの経済的特徴	258
公共財組織における会計の特徴	264
NRIOと企業会計の相互関係	272
要 約	273
エピローグ .....	276
索 引 .....	277

## 第1部 企業の契約理論